

バードリサーチ ニュース

2006年10月号 Vol.3 No.10

2006. 10.13.

Photo by Tsutsumi Akira

活動報告

ヒクイナ調査 調査結果速報！

平野 敏明

1. 調査地24ヶ所、アンケートは17ヶ所

ヒクイナ調査へのご協力、ありがとうございます。9月20日までに届いた情報をもとに、今年の繁殖期の生息状況について簡単にまとめましたので、お知らせいたします。

夜および早朝の調査にもかかわらず8名の方が現地調査に参加していただき、合計25ヶ所で鳴声再生による調査を実施することができました。府県別の調査地数は、福島県2ヶ所、栃木県9ヶ所、茨城県4ヶ所、千葉県3ヶ所、兵庫県3ヶ所、鹿児島県2ヶ所、沖縄県2ヶ所でした。また、5人の方にはアンケートにお答えいただきました。箇所数を都道府県ごとにみると、秋田県2ヶ所、茨城県1ヶ所、京都府3ヶ所、大阪府2ヶ所、兵庫県7ヶ所、熊本県1ヶ所でした。この他、岡山県1ヶ所から冬期の記録が届きました。



写真1. ヒクイナ。
[Photo by 鈴木博志]

2. 2006年の繁殖期の生息状況

現地調査25ヶ所と2006年の繁殖期の記録が書かれていた6ヶ所のアンケート結果をもとに、生息の有無をまとめました(図)。2006年の繁殖期にヒクイナは、15ヶ所で、少なくとも23羽が記録されました。生息が確認された府県は、福島県、栃木県、茨城県、京都府、大阪府、兵庫県、鹿児島県、沖縄県の2府6県です。このうち、兵庫県や大阪府、京都府、鹿児島県、沖縄県では複数の個体が記録され、京都府ではヒナ連れが、兵庫県ではつがいを確認されました。また、鹿児島県や沖縄県では記録された個体数が多く、特に、鹿児島県肝属郡肝付町では1地域で5羽も記録されたほどです。一方、東日本の茨城県や栃木県、福島県では生息が確認されたものの、1ヶ所あたりの個体数は1羽で、調査を実施しても生息が確認できなかった場所が18ヶ所中14ヶ所もありました。

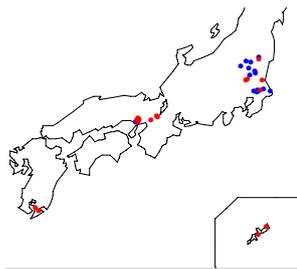


図. 2006年の繁殖期におけるヒクイナの調査地と生息確認地点(●:生息確認, ●:生息未確認)。

今回生息が確認された場所の環境は、水田が10ヶ所、湿原が2ヶ所、河川敷が3ヶ所でした。現地調査で生息が確認された9ヶ所では、植物の草丈は0.5m以下と0.5~1.5m以下がそれぞれ4ヶ所、2.5m以上が1ヶ所で、イネやヨシ、ガマ、スゲ類でした。そして、現地調査で生息が確認されたすべての場所は、地表に10cm前後、深い場所では20cmの水がありました(写真2)。



写真2. ヒクイナの生息環境。
(栃木県藤岡町渡良瀬遊水地)

3. 西日本には、まだ多くいる？

現地調査およびアンケート調査の調査地は、関東地方および東北地方の一部と近畿地方、九州南部、沖縄県とやや地域的に偏っていましたが、興味深い結果がわかりました。その1つは、関東以北でヒクイナが少ないことです。生息こそ確認されましたが、調査地数が多いにもかかわらず、2006年の生息確認地点は5ヶ所と少ないのです。

一方、京都府から兵庫県では、多数生息記録が得られ、まだ多くのヒクイナが生息していることがわかりました。これらの地域を地図で調べてみると、大小の池沼がたくさん点在している地域であることがわかります。

ヒクイナが湿地環境に多いという点は、今回生息が確認されたほとんどの地域で共通していました。すなわち、水田や河川の湿地状の草むらで、草丈がせいぜい1.5mの植物が生育し地表に20cm以下の深さで水が覆っている環境です。ヒクイナのご飯は、昆虫類やカエル類、軟体動物、植物の種子とされています。湿田や沼の周りの水辺にはヒクイナのご飯となる水生昆虫類などの小動物が多く生息しています。さらに、ヒクイナはイネやスゲ類など草丈の低い植物を使って巣を造るので、営巣環境が多く存在することも理由のひとつでしょう。

4. 今後もヒクイナの情報を募集しています！

今回情報がなかった四国地方や中国地方、九州北部には、近畿地方や鹿児島県などのようにまだヒクイナが多く生息しているのでしょうか。また、東海地方や中部地方ではどうなのでしょう。ヒクイナの情報をお持ちの方はぜひご一報ください。少しでも多くの情報を集めて、より正確な生息状況を明らかにしたいと思います。

ヒクイナ調査は来年も実施する予定です。来年も現地調査、アンケート調査にご協力ください。

海外最新情報

イギリスの水鳥調査 The Wetland Bird Survey (WeBS)

野村 浩子 パードリサーチ嘱託研究員

2005年、日本国内20ヶ所の湿原や湖沼がラムサール条約湿地として指定され、日本の条約湿地は一気に33ヶ所となりました。多様な生物の生息地として、湿地の重要性が広く認識されるようになってきたことがうかがえます。

さて、鳥に関心のある皆様にとっては、湿地と言えば水鳥。水鳥と言えば、ハクチョウ、ガン・カモ、シギ・チドリ...等々、人によってさまざまとは思いますが、今回は、こうした水鳥を対象に、イギリスの4つの団体が合同で実施しているモニタリング調査「Wetland Bird Survey」(以下WeBS)をご紹介します。

1. WeBSとは？

WeBSはBritish Trust for Ornithology(BTO)を事務局として、The Wildfowl and Wetlands Trust(WWT), Royal Society for the Protection of Birds(RSPB), the Joint Nature Conservation Committee(JNCC)の4団体が合同で実施している、非繁殖期のイギリスの水鳥のモニタリング調査です。WeBS Core Counts(コアカウント調査)とWeBS Low Tide Counts(干潮時カウント調査)の2種類のカウント調査で構成されており、どちらも非繁殖期に行なわれます。調査員はボランティアが中心で、BTOのホームページやニュースレターなどで随時募集しているようです。

2. 調査の目的

WeBSは、水鳥と水鳥が生息する湿地を保全していくことを目的として、1)個体数の推定、2)個体数変化と分布動向の推定、3)水鳥生息地の重要性の評価をします。

得られた結果は、自然保護団体が保全計画を立てる際や、開発業者が開発計画を立てる際の基礎情報となり、湿地やそこに生息する水鳥の持続可能な利用と管理に役立てられています。また、国際レベルで水鳥のモニタリング調査についての調整や報告を行なっているWetlands International(WI)にもデータを提供しています。

3. 調査の方法

● コアカウント調査 (WeBS Core Counts)

9月から翌年3月にかけて毎月1回行なう全国一斉カウント調査です。湖、海岸、池、貯水池、淡水湿地、砂利採掘場、河川、運河など、さまざまな環境が調査地となっております。その数は約2000ヶ所にもなります。

ダブルカウントを避けるために、すべての調査地を毎月同じ日に調査します。調査日は1年前には「優先日」として決まっており、調査時間帯に満潮になる日曜日に設定されています。調査時間は朝が理想的ですが、海岸沿いの調査地の場合は、同じ日でも場所によって潮位が異なるため、時間帯を変えて調査することになっています。

カウントの対象となるのは、WIが定義する水鳥で、イギリスではアビ類、カイツブリ類、ウ類、サギ類、ヘラサギ類、ハクチョウ類、ガン類、カモ類、クイナ類、ツル類、シギ類、チドリ類、カワセミ類が含まれます。カモメ類とアジサシ類は任意でカウントします。また、帰化した種やカゴ抜けした種などについてもモニタリングの必要性があると考えているため、非在来種として記録します。

姿を隠す習性を持つために確認が難しい種もありますが、姿あるいは鳴き声を確認したものだけを記録します。鳥が大きな群れでいる場合は、群れを5~1000羽のグループに分け、グループがいくつあるかを数えます。



写真2. ホシハジロ。
[Photo by 谷英雄]

● 干潮時カウント調査 (WeBS Low Tide Counts)

11月から翌年2月にかけて、干潮時の河口で毎月1回行なわれるカウント調査です。この調査は、コアカウント調査では調べることができない、干潮時の分布や越冬期に重要となる採餌場所についてのデータを収集する目的で、1992-93年の冬から始まりました。毎年20ヶ所程度の河口を、少なくとも6年に1回は調査するように選定されます。2004-05年冬までに73ヶ所で調査がおこなわれました。調査地は、地形の特徴などによって同じくらいの大きさの区域に分割してカウントします。コアカウント調査のようにすべての調査地を同じ日に調査するための優先日は設定されておらず、調査地ごとに調査日を決め、潮位が比較的安定していて、鳥の分布変化も小さいと考えられる干潮の前後2時間に調査します。

カウントの対象となるのはコアカウント調査と同じですが、特にシギ類、チドリ類、ガン類、カモ類、ハクチョウ類に重点が置かれています。



写真2. キンクロハジロ。

4. 調査の結果とまとめ

コアカウント調査も干潮時カウント調査も、調査用紙は調査ボランティアからローカルオーガナイザーと呼ばれる地域のまとめ役に渡されます。調査結果はそこで一度チェックを受け、さらにナショナルオーガナイザーと呼ばれるBTOのWeBS調査担当者によるチェックを受けて、ようやくその後に入力が行なわれるようです。

分析はBTOのWeBS分析担当者によって進められ、毎年報告書が発行されています。この報告書では、農地でのガン類調査や、河口ではない海岸での水鳥調査など、冬期におこなわれているほかの水鳥調査のデータも用いて、種ごとにまとめられています。

調査ボランティアには、報告書と年一回発行のニュースレターが無料で送付されます。なお、報告書はBTOのホームページから閲覧することができます。

5. WeBSのデータからわかること

BTOはコアカウント調査のデータを使って、『WeBS Alerts』という報告書を最近公開しました。調査地(おにも)

海外最新情報

保護区), 地域(北アイルランド・イングランド・スコットランド・ウェールズ), 国全体といったさまざまな空間スケールと, 短期(5年)・中期(10年)・長期(25年)の時間スケールで, イギリスにおける越冬期の水鳥の個体数変化と分布動向を明らかにする目的でまとめられています. 名前の通り, 著しい減少がみられた種については, 時間スケールごとに警報(Alert)が出されています.

● 各調査地の個体数変化

北アイルランドにあるイギリス最大の湖, ネイ湖と, その北岸に隣接するベグ湖では, 潜水採食性カモ類の個体数が減少していることがわかっています. 特にホシハジロは, 1995-96年冬の調査でおよそ30,000羽(イギリス全体の約75%, 北ヨーロッパ全体の約8%の個体数)が確認されましたが, 2003-04年冬の調査では8,000羽以下だったため(図1), 中期的(10年)・長期的(25年)に危険度の高い警報が出されています. キンクロハジロについても, 1997-98年冬の調査で27,000羽以上(イギリス全体の約50%, 北ヨーロッパ全体の約2%の個体数)が確認されましたが, 2003-04年冬の調査では9,000羽以下でした(図2).

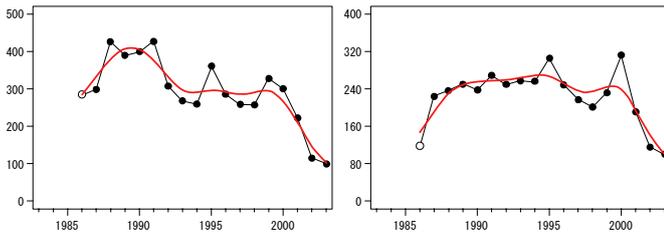


図1. ネイ湖とベグ湖におけるホシハジロの個体数変化. 縦軸は年指数, 横軸は年.

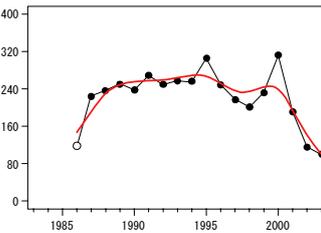


図2. ネイ湖とベグ湖における, キンクロハジロの個体数変化.

● どうやって個体数変化を調べているの? ●

WeBS Alertsでは, 最新の調査(現在の報告書では2003-04年)で得られた合計カウント数(種ごとの)を100とし, これをもとに他の年の合計カウント数を指数化します. これを年指数(Annual indices)と言い, 数値モデルを用いて年指数の変化を平滑化した曲線から個体数変化を調べています.

● 各地域・国全体の個体数変化

より広い空間スケールで個体数変化を見ると, ホシハジロは, ネイ湖やベグ湖がある北アイルランド地方全体でも, そしてイギリス全体でも減少傾向にあります. 一方, キンクロハジロは, ネイ湖とベグ湖での減少が影響して北アイルランド地方では減少傾向にあるものの(図3), ほかの地域では増加傾向にあり, イギリス全体で見ると個体数は増加している(図3), その数は過去最多を記録しています.

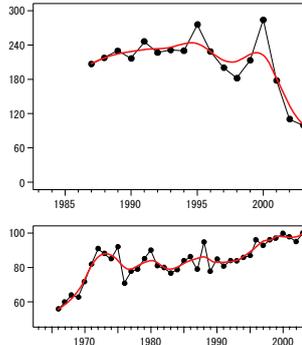


図3. 北アイルランド地方(上)とイギリス全土(下)におけるキンクロハジロの個体数変化.

● 短期, 中期, 長期の個体数変化

また, 異なる時間スケールでの個体数変化も見ることができます. 図4は, 各調査地のキンクロハジロの個体数の増減を, 短期(5年), 中期(10年), 長期(25年)の3つの期間に分けて地図上で示したもので, イングランド地方の中央部に, 中・長期的に大幅に増加した調査地が存在することがわかります. イングランド地方のキンクロハジロの個体数変化を見ると, 図4と同じような曲線を描いて増加していました. おそらくこの調査地が, ネイ湖・ベグ湖での減少を打ち消し, イギリスにおけるキンクロハジロの個体数を過去最高の水準にまで引き上げた生息地だと思われます.



写真2. キンクロハジロの群.

では北アイルランド地方のキンクロハジロがイングランド地方に移動したのでしょうか? これについてはWeBSの調査方法ではわかりませんので, さらなる調査が必要になりますが, こうした新たな疑問が生じることにWeBSの意義があるのでしょうね.

WeBS AlertsはBTOホームページで閲覧することができます. ぜひご覧ください.

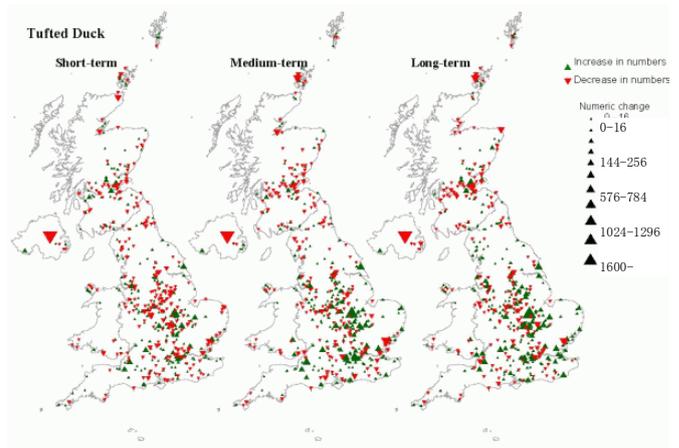


図4. キンクロハジロの増減を, 短期=5年(左), 中期=10年(中央), 長期=25年(右)の3つの期間で区切り, 調査地ごとに示している. ▲は増加, ▼は減少, サイズは数に比例.

5. 参考ホームページ

BTO

<http://www.bto.org/index.htm>

The Wetland Bird Survey 2003-04

http://www.bto.org/survey/webs/WildfowlWader2003_04.htm

The online WeBS Alerts report

<http://bix1.bto.org/webs/alerts2005/Results/contents.htm>

WeBS News No 21: Summer 2005

<http://www.bto.org/survey/webs/images/websnews21summer2005.pdf>

外務省 ラムサール条約

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/jyoyaku/rmsl.html>

カルガモ 英: Spot-billed Duck 学: *Anas poecilorhyncha*

1. 分類と形態

分類: カモ目 カモ科

全長: 515-645mm 翼長: 245-292mm
 尾長: 79-102mm 嘴峰長: 45-49mm
 ふ蹠長: 41-51mm 体重: 750-1156g

※全長, 体重の数値はKear(2005), その他は小林(1985)による。

羽色:

頭上, 背, 腰, 尾は黒褐色で, 眉斑は黄白色. 過眼線は黒褐色. 胸は黄褐色と黒褐色とのまだらで腹に移るにしたがい, 黒褐色. 翼鏡は藍黒色の金属光沢. 三列風切羽の外側が白い. 嘴の先端と脚の橙黄色は野外でよく目立つ.

一般的に雌雄同色といわれるが, 上尾筒と下尾筒の羽色が雌雄間で異なる. 一枚一枚の羽毛を見ると, オスでは全体が黒色であるのに対し, メスでは縁が茶色い. そのため, オスの上尾筒と下尾筒が真っ黒にみえるのに対し, メスでは茶色い縁どりのあるまだら模様となり, 遠くからみると茶色っぽく見える. 繁殖期, 2羽でいるカルガモの上尾筒と下尾筒をよく観察すると, この差が良くわかり, つがいであろう, と推測できる.



写真1. カルガモのメス.

鳴き声:

グエツ, グエツと鳴き, マガモによく似るが, より響き渡る声で鳴く.

2. 分布と生息環境

分布:

アジア東部と南東部に分布し, 3亜種に分かれる. 日本でみられる *A.p.zonorhyncha* は, アムール地方, サハリン, 中国, 朝鮮, 日本に分布する. 国内ではほぼ全国で繁殖し, 本州以南では留鳥のものが多く, 標識調査によりサハリンや中国大陸に渡るものがあることが明らかになっている.

生息環境:

湖沼, 沼沢, 水田, 湿地, 干潟, 河川などに生息する. 標高の低い平野部に生息し, 特に平地の水辺に多い. 繁殖期の4月下旬~7月になると, つがいごとに別れて, 平地の沼沢, 河川, 池畔などの草原やヨシ原に営巣する. 河川の中洲など島状になっているところではコロニー状に営巣することもある. 越冬期には, 湖沼, 河川, 池など, ほとんどの水域で見ることができる. また, マガモなどと一緒に沿岸域でも見られるようになる.

3. 生活史



巣: 草本, ササ, ヨシ, 枯れ草などを材料に皿形の巣を作る. 外径は22~30cm, 内径は15~20cm, 深さ8~12cmほどである(写真2).

卵: 卵はクリーム白色の無斑. 大きさは 55.5×41.6mm, 重さは 44.3~57.4g (写真3). 一腹卵数は10~14個.



写真2. カルガモの巣.

抱卵育雛期間:

巣作りや抱卵はメスだけが行ない, 26~28日でヒナが孵化する. 孵化後, 羽毛が乾くとヒナはすぐに巣を離れ, メス親について行動する. 8月になると幼鳥は親とほぼ同じ大きさになり, 飛翔力がつく. この頃になると, まとまった群れでみられるようになる.



写真3. カルガモの卵.

4. 食性と採食行動

食性は主に植物食で, 稲などをはじめ, さまざまな植物の種子や葉を食べ, 採食場所に依じて, こしとり, ついばみ, 逆立ちなどの行動を使い分ける.



写真4. 水田で採食するカルガモ.

水田における昼夜別の生息密度と行動の違いを調査したところ, 昼夜別の生息密度は, 昼よりも夜のほうが有意に高かった(図1). また, 昼の行動では採食が67%, 休息が22%であるのに対し, 夜の行動では採食が94%, 休息が3%であった(図2). したがって, カルガモは夜の水田を高い頻度で採食地として利用していると考えられる. さらに, 昼夜における1群れあたりの個体数の割合に違いが認められた. すなわち, 夜は2羽(つがい)の割合(63%)が昼(41%)より高いことに加えて, 3羽以上の群れの割合は低かった.

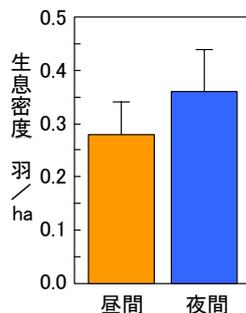


図1. 昼夜別の水田における生息密度.

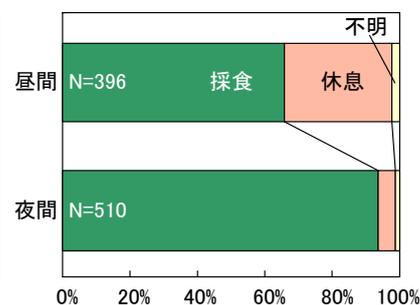


図2. 昼夜別の行動の違い.

4. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● メスによる子殺し

繁殖期の特異的な行動として, カルガモのメスによる子殺しがある(Shimada et al. 2002). 千葉県谷津干潟で, 1羽のヒナを連れたメスがカルガモのヒナ8羽, オカヨシガモ

のヒナ3羽を攻撃して殺した例が観察された。都市域のような繁殖地の限られる場所では繁殖密度が高くなり、親の攻撃性が高まるために子殺しが起きると考えられている。

● カルガモとマガモの関係

形態や行動が類似しているため、冬に飛来するマガモはカルガモと生態的同位種といわれている。実際の分布をみると、両種間の個体数の差が極端に大きいときは、多い方の種の群れに取り込まれることもあるが、ある程度の群れサイズになると、混群を形成せずに単独群でいることが多かった。伊豆沼のような広い場所(289ha)では、マガモは沼西部に、カルガモは東部に分布した。前述した小さい都市公園では、池ごとに優占種が異なり、カルガモの密度の高い池はマガモが低く、逆にマガモの密度が高い池ではカルガモが低いという反比例の関係が見られる。

● 保全生態学的課題

繁殖期、東北地方におけるカルガモは湛水直撒栽培に対して、播いた種籾を食害するほか、圃場の表面を踏みつけることによって、種籾を地中深くに埋め込み、出芽率を低下させるという害を引き起こす。カルガモの生息密度は人家に近いほど、すなわち狩猟圧の低い場所ほど高く、そして生息密度が高いほど食害率が高いことが明らかになった(図3)。この結果をもとにカルガモの食害に関するハザードマップが作成されている。(図4)。

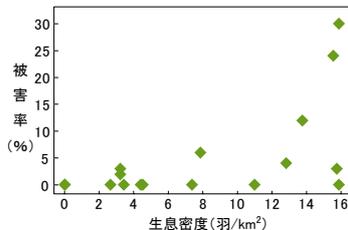


図3. カルガモの生息密度と被害率との関係。被害率はアンケート調査、生息密度は野外調査で調べた。なお、被害を調べた水田はカルガモに対する防鳥対策を行っていない水田とした。

越冬期、カルガモをはじめ、マガモやコガモのように昼間休息する水面採食性カモ類の場合、面積の小さい都市公園の池などでは、人の影響がこれらのカモ類の個体数を大きく左右すると予測される。人の立ち入れる場所からカルガモの逃避距離(非給餌池では約30m, 給餌池では約10m)分の範囲を除いた面積を安全面積と考え、カモ類の個体数との関係を分析した。カモ類の個体数と全面積では有意な相関は認められなかったが、個体数と安全面積では有意な相関が認められ、池の安全性(人と

の距離)が水面採食性カモ類の環境選択に重要な要因であることが示唆された(Shimada 2001)。

カルガモは一番身近なカモである。しかし、その生態はトピック的にしか明らかになっていない。日本ではあたりまえに見られるカモであるが、アジア東部にのみ分布することを考えると、もっとしっかり研究をする必要がある。

5. 引用・参考文献

東淳樹・辻華織・奥山智子・佐藤太郎. 2004. 東北地方の水田地帯におけるカルガモの生息状況とそれに及ぼす要因. 日本鳥学会2004年度大会講演要旨集: 71.
 東淳樹・熊谷徹. 2005. 水田地帯における繁殖期のカルガモの昼夜別の生息数と行動の違い. 日本鳥学会2005年度大会講演要旨集: 93.
 Kear, J. 2005. Ducks, Geese and Swans, volume 2. Oxford University Press, Oxford.
 清棲幸保. 1966. 野鳥の事典. 東京堂出版, 東京.
 小林桂助. 1985. 原色日本鳥類図鑑. 保育社, 大阪.
 黒田長禮. 1939. 雁と鴨. 修教社書院, 東京.
 熊谷徹. 2005. カルガモの水田における生態および生息密度とその周辺環境の関係—ハザードマップ作成による食害回避について—. 岩手大学卒業論文, 盛岡.
 佐藤太郎・東淳樹. 2003. 東北地方の湛水直播栽培農家へのアンケート調査によるカルガモ被害の実態解析. 農村計画論文集5:13-18.
 Shimada, T. 2001. Roosting of ducks on open water: resting site selection in relation to safety. Japanese Journal of Ornithology 50: 167-174.
 Shimada, T., Kuwabara, K., Yamakoshi, S. & Shichi, T. 2002. A case of infanticide in the Spot-billed Duck in circumstances of high breeding density. Journal of Ethology 20: 87-88.

執筆者

嶋田哲郎 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
 東淳樹・熊谷徹 岩手大学農学部

学生のころ、千葉県の東京湾岸をフィールドにカルガモをはじめとするカモ類の調査をしていました。共著者の東さんと知り合ったのもカルガモが縁でした。伊豆沼に来てからもカルガモは気になる鳥のひとつで、面白い研究テーマはないかなあ、といつも眺めています。【嶋田哲郎】

2001年から農水省のプロジェクト研究で「カルガモの生息数調査による湛水直播ハザードマップの作成」に取り組んできました。昨年、卒論生の熊谷君と生息数調査、行動調査を実施し、東北の水田地帯におけるカルガモ被害のハザードマップを作成しました。もし、機会があれば1年間のカルガモの暮らしに密着してみたいと思っています。



左から、熊谷、嶋田、東

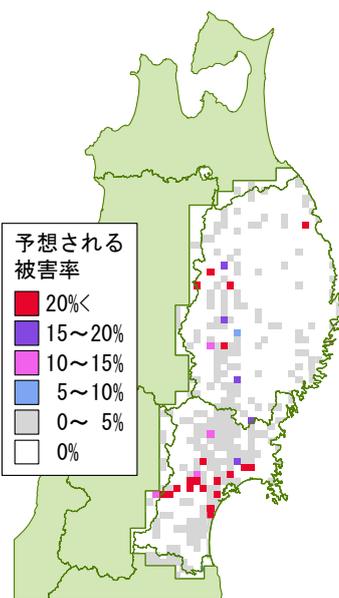


図4. カルガモの被害に対するハザードマップ。メッシュは1辺が5km.

【東淳樹・熊谷徹】

学会情報

日本鳥学会2006年度大会参加報告

9月15日から19日にかけて岩手大学で開催された鳥学会に参加してきました。ポスター発表はいつもとそれほど変わらず80ほどありましたが、口頭発表は全部で40ぐらいで、少し少なかったように思います。今回は生態の研究から少し離れて、「文化におけるサギ」というタイトルで、サギの名前の由来や、文学の中に現われるサギ観の西欧と日本の違いなどについての自由集会があったり、自由集会の枠で絵画教室があったり、絵画展があったりと一般の人にも楽しめる学会になっていました。僕の描く鳥の絵は怪物と言われるので、絵画教室で少し鍛えてもらえばよかったかも…。同じ時間にカワウの自由集会に出ていたので参加できなかったのですが、どんな様子だったのか今になって興味を沸いてきてしまいました。

さて、話がそれてしまいましたが、口頭発表とポスター発表の中から、ぼくが面白いと思った発表を今回は一つだけ紹介したいと思います。



写真1. 口頭発表の会場風景。

日本のツバメは喉が赤いほど性選択上有利 ○長谷川克・新井絵美・渡辺守・中村雅彦

ヨーロッパに生息するツバメでは、尾羽の長いオスほどメスに好まれるということがわかっています。ところが、日本のツバメのオスの尾羽はヨーロッパの個体群ほど長くありません。逆に喉の赤いパッチはヨーロッパよりも大きいのです。演者らはそのことに注目して、喉のパッチの大きさや色と繁殖開始日や巣立ちヒナ数の関係を調べました。データの解析の仕方には、もう一工夫する必要がありそうでしたが、結果は面白く、日本のツバメでは、喉のパッチが大きく、赤い色も濃い個体のほうが、繁殖開始日が早く、繁殖回数も多く、1年に巣立たせたヒナの数も多いという傾向が得られていました。経験を積んだ鳥ほど早く渡ってきて繁殖を開始するということもありそうなので、できれば年齢と喉のパッチとの関係も調べられると面白いのではないかと思います。【高木憲太郎】



写真2. ツバメのオス(左)とメス(右)。 [Photo by 白馬ツバメ]

参加型調査

ヒヨドリ渡り調査2006 参加のお誘い

あちこちでヒヨドリの渡りを見かけるシーズンとなりました。2004年、2005年と続けましたヒヨドリの渡り調査を今年も行っています。是非ご協力のほど、よろしくお願いします。

ヒヨドリの渡り情報は2004年には50名、90ヶ所から、2005年には33名、68ヶ所から、観察総数は88,459羽、174,834羽という結果を得ることができました。2年分のデータを集めて、興味深かったのは、南の地

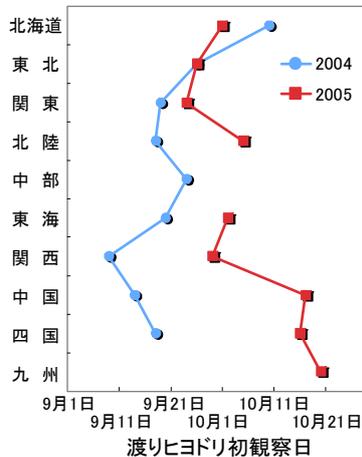


図. 2004年と2005年のヒヨドリの渡り初観察日。全般に2004年よりも2005年のほうが遅く、南に行くほど顕著。

域で渡りの開始日が年によって大きく異なっていたことです。これは木の実の豊凶とどうやら関係がありそうです。2004年は全国的に木の実が不作でした。特に関西以西では大凶作でしたが、2005年は逆に豊作だったらしいのです。そのために、木の実の少ない年は早く移動を開始し、多い年は開始が遅れたのではないかと考えています。

このことを明らかにするためには、さらに複数年の調査が必要と思われます。調査方法や過去の結果などは下記のHPから見る事が可能です(中央農研、鳥害などで検索、チームのトップページからリンクをたどると簡単です)。調査などと言わず、たまたまヒヨドリが渡っていくのを見かけた時に、場所・時間・数・飛去方向を連絡していただければ十分です。是非ご協力のほど、よろしくお願いします。

【山口恭弘 中央農研 鳥獣害研究サブチーム】

● 連絡先

山口恭弘 E-mail: yamay@affrc.go.jp
Tel: 029-838-8925 Fax: 029-838-8837
<http://narc.naro.affrc.go.jp/kouchi/chougai/wildlife/bulbul/bulbul-migration.html>